

イエスのことば 第2回

「今はそうさせてもらいたい。このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです。」(マタイ 3:15)

□文脈の確認

1. メシアはユダヤ人の王として来る(マタ 2:2)。そしてメシアの王国では、ユダヤ人のみならず、全世界を治める。
2. イエスをその王であると神が認めたことを確認する記事が3つある。第一にイエスがヨルダン川で先駆者ヨハネから洗礼を受けたときに、聖霊なる神が鳩の姿で現れ、父なる神の声が天から響いたこと、第二にイエスが荒野でサタンの誘惑を受けてこれを退けたこと、第三に先駆者ヨハネがイエスをメシアであると証言したこと、この3つである。
3. 本日の「イエスのことば」は、イエスが王であると認められた第一の出来事、イエスの受洗の記事の中に記されたことばである。

□アウトライン

A) 先駆者ヨハネの登場からイエスの受洗まで

1. 福音のはじめ
2. 神のことばが下った
3. ヨハネのメッセージ
4. ヨハネの解説
5. ヨハネの約束

B) イエスの受洗

1. 3つの洗礼
2. ヨハネのとまどい
3. イエスがヨハネの洗礼を受けた第一の目的
4. そのほかの5つの目的
5. イエスの年齢

□先駆者ヨハネの登場からイエスの受洗まで、約6か月間の出来事に関する箇所

1. 福音のはじめ (マルコ 1:1)
 - (1) 1節 「福音のはじめ」とは、先駆者ヨハネの登場である。続く2節から、マルコの福音書は、先駆者ヨハネに関して最初に記す。
 - (2) 1節 「福音」とは、「よい知らせ」。その知らせの内容は、文脈で決まる。→ 4つの福音書の中に出てくる福音の意味内容は、「福音の3要素」(Iコリ 15:1~4)とは限らない。メシアの十字架の死よりも前の時期だからである。文脈をよく見る必要がある。
 - (3) 1節 「神の子イエス・キリスト」・・・神の子とは、メシアの呼称のひとつ
 - ① 旧約聖書では、「神の子」はイスラエル民族を指すことがある(出 4:22~23、ホセア 11:1)。
 - ② メシアについて「神の子」という呼称を使う場合、それは、「イスラエル民族のメシア」という意味を含む。
2. 神のことばが下った (ルカ 3:1~2)
 - (1) 1節 皇帝テベリオの治世第15年 → 紀元26年
 - (2) 2節 神のことばがヨハネに下った
 - ① 旧約聖書の最後の預言者たち ハガイ、ゼカリヤ、マラキ
 - ② 彼らが死んで以降、預言は止まった。
 - ③ 2節「神のことば」：ギレーマ、発声されたことば → ヨハネは神の声を聞いて、預言者として立てられた。
3. ヨハネのメッセージ (マタイ 3:1~6、マルコ 1:2~6、ルカ 3:3~6)
 - (1) ヨハネの登場は、預言の成就である (マルコ 1:2~4)
 - ① イザヤ 40:3
 - ② マラキ 3:1
 - (2) ヨハネの三重のメッセージ
 - ① 悔い改めよ【考えを変えよ】: 旧約聖書では「神に立ち返れ」
 - ② メシアの王国は近い (そのための備えをせよ)
 - ③ 悔い改めの洗礼を受けて、罪の赦しを得よ
 - (3) ヨハネの活動
 - ① マタイ 3:4 預言者エリヤに似た外観。日常の食事は、いなごと野蜜
 - ② マルコ 1:5 ヨハネの活動は当初、きわめて大きな反響があった。
4. ヨハネの解説 (マタイ 3:7~10、ルカ 3:7~14)
 - (1) ユダヤ議会 (サンヘドリン) による調査
 - ① 構成メンバーは、律法学者たちが多いパリサイ派 (→パリサイ人【びと】) と祭司たちが多いサドカイ派 (→サドカイ人)

- ② 議長は、大祭司
 - ③ メシアが登場したら、観察・審問・判定の3つの段階を経て、真正のメシアか、偽のメシアかを調査することになっていた。
 - ④ マタイ3:7「パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けに来る」
 - 直訳は、「彼のバプテスマの所に」
 - 調査団の一行は、ヨハネがバプテスマを授けていた場所に来た
 - ⑤ ヨハネは調査団に対して、「まむしのすえたち」と叱責した。
 - ⑥ まだ観察段階なので、調査団は、ここでは一切、質問や反論をしなかった。
- (2) マタイ3:7「必ず来る御怒り」=ヤハウエの日、主の日=大患難期。この時期を経てメシアの王国（天の御国、神の国）になる。
- (3) ルカ3:10~14 受洗した群衆、取税人たち、兵士たちへの教え
- ① ここでの教えは、明らかに、受洗者たちのそれまでの常識的感覚や職業柄からすると真逆のことである。
 - ② ルカ3:4~8
 - ヨハネが説いた悔い改めのバプテスマは、何が動機付けになっていたか・・・神が来ること（4節）、そして神に立ち返っていなければ、神の怒りを受けるといふこと（7節）、この二つである。
 - ヨハネは、受洗者たちに「悔い改めにふさわしい実を結びなさい」（8節）と言った。
 - ③ 悔い改めて神に立ち返ったというなら、それはその人自身の生活が変わるといふことで現れるはずである。
 - かつては自分のことばかり考えていた生き方から、今や他人のことを気遣うようになる。
 - 神の前に自分は立っているのだという自覚がある。そして他の人たちに持ち物を分け与える、他の人たちにも敬意をもって接するようになる。
5. ヨハネの約束（マタイ3:11~12、マルコ1:7~8、ルカ3:15~18）
- (1) 自分とメシアとの比較：主人が脱いだサンダルを運ぶのは奴隷の役目。しかし、主人が履いているサンダルのひもを解いて脱がせるというのは、通常、奴隷でもしない。自分とメシアとでは比較にならないほど、絶対的な違いがあるという意味。自分は人、メシアは神が人となられたお方である、という認識が前提にある。
 - (2) 聖霊の中にバプテスマする→倉に納める=メシアの王国に入れる
 - (3) 火の中にバプテスマする、その火は消えない火。これはゲヘナ（火の池）である。
 - (4) メシアを認めて聖霊のバプテスマを受けるか、メシアを受け入れないで火の池に行くか、そのどちらかである。中間は、ない。

□イエスの受洗（マタイ 3：13～17、マルコ 1：9～11、ルカ 3：21～23）

1. 3つの洗礼

- (1) ユダヤ教の「浸礼」：全身を水の中に浸けて、儀式的汚れを清める。自分で
 - (2) 先駆者ヨハネの「洗礼」：メシアの王国に入るための二つの準備
 - ① 悔い改める・・・考えを変える、神に立ち返るという意思表示
 - ② 民族と自分の罪を告白する（祈りの中で、神に向かって）
 - ③ ①と②は、旧約聖書の預言者たちが語ったメッセージの集約である。そしてそれを受け入れることが、メシアの王国に入る第一の準備となる。
 - ④ メシア王国に入る準備のもうひとつは、メシアを信じるということである。誰がメシアであるかは、「先駆者である自分が指し示す」とヨハネは人々に約束した。
 - ⑤ よって、先駆者ヨハネから洗礼を受けるということは、次の二つのことを意味する。
 - 第一は、ヨハネのメッセージを受け入れ、「ヨハネの教えと一体化します」という表明である。
 - 第二は、ヨハネがやがて指し示すことになる人を、「メシアとして信じます」という表明である。
 - ⑥ メシアを信じることにつながる洗礼なので、「罪の赦しのための悔い改めのバプテスマ」（マルコ 1：4）である。ヨハネの洗礼そのものに罪を赦す力はない。
 - (3) 使徒の働き第2章以降での教会の「洗礼」
 - ① イエスをメシアとして信じた瞬間に、罪の赦しを受け、聖霊の中に浸されて、聖霊と一体化した。同時に、信者は、イエスの死・葬り・復活と一体化した。
 - ② この聖霊との一体化、イエス・キリストとの一体化を象徴する儀式が、水の洗礼である。教会の牧師（長老・監督）が信者に授ける。
2. ヨハネのとまどい：なぜ、メシアであるイエスが、悔い改めの洗礼を受けるのか？
- (1) メシアは神が人となられたお方である。神に立ち返る必要はない。
 - (2) メシアは罪を犯していない。罪の赦しを受ける必要はない。
 - (3) ヨハネはメシアの先駆者として、メシアを指し示すことが使命。そしてヨハネから洗礼を受ける者は、「ヨハネが指し示す人を、メシアとして信じます」という意思表示として洗礼を受ける。イエスはそのメシアご本人であるのだから、ヨハネの洗礼を受ける必要はない。
 - (4) マタイ 3：14 ヨハネは、イエスの申し出をいったん止めた。
 - (5) マタイ 3：15 しかし、イエスは、洗礼を授けるようヨハネに求めた。

3. イエスが洗礼を受けた第一の目的

- (1) 15節 「今はそうさせてもらいたい」
- (2) 15節 原文を直訳すると「このようにして ふさわしいからである わたしたちにとって 完全に満たす すべての義を」
 - ① 「義」(正しいこと)とは、ある絶対的基準に合致した生活をするることである。そして、この時点での基準とは、モーセの律法である。
 - ② 「すべての義を完全に満たす」とは、モーセの律法を完全に守ることである。単に形式的に規定通りにするというのではなく、律法が示す神のみこころに完全に一致した生き方をする、ということである。
 - ③ この洗礼を境として、イエスはメシアとしての公生涯に入る。サタンの攻撃、そしてサタンを背後にした人々からの攻撃がイエスに集中するようになる。そのような攻撃の主戦場は、モーセの律法を守っているかどうかである。律法の義に達していないのであれば、メシアとして失格となるからである。
 - ④ イエスがヨハネの洗礼を受ける目的は、モーセの律法と一体化すること、メシアとしてモーセの律法を完全に守るという意思表示である。
- (3) サタンがイエスのこの意思表示を早速テストした出来事が、マタイ 4章の記事となる。

4. そのほかの5つの目的

- (1) 旧約聖書全体に一体化する
 - ① 先駆者ヨハネのメッセージは、旧約聖書の預言者たちのメッセージを集約したものである。
 - ② イエスは、旧約聖書とは全く別の新しい教えを始めたのではない。旧約聖書が待ち望んだメシアとして来られたのである。
 - ③ イエスが説く神の国は、ヨハネが指し示した神の国と全く同じである。
 - ④ イエスが洗礼を受けたのは、ヨハネの教えにイエスも賛同したということ
- (2) イスラエル民族と一体化する
 - ① 民族の罪を告白する祈りをしつつ、ヨハネから洗礼を受ける。このとき、イエスはご自身も民族の罪を告白することで、イスラエル民族のひとりとして洗礼を受けることになる。すなわち、イスラエル民族との一体化である。
 - ② さらに、イエスの場合は、イスラエル民族のひとりであることにとどまらず、イスラエル民族の王である。
 - 当時のユダヤ人たちには、神がイエスを王として立てたという証明、すなわち神による認証を必要とした。
 - 洗礼のすぐあとに、目に見えるかたちで【天が開け、聖霊が鳩の形で下った】、また耳に聞こえるかたちで【天から神の声が聞こえた】、神がイエスをメシアとして立てたことが明らかにされた(マタイ 3:16~17)。

- 当時のユダヤ教ラビたちは、次のように民衆に説いていた
 - 「神の霊が現れるときは鳩のような姿で」
 - 「預言者が出ない時期には、神のみこころを告げるため、天から短い声が響く」
 - マタイ 3:16~17 は、当時のユダヤ人たちがメシアを受け入れることのできるよう、神がラビたちの教えに合わせてくださった。
- ③ イエスがイスラエル民族と一体化したということが、マタイ 4 章のサタンとの対決の場所が荒野であること、その期間が 40 日であることと関係する。詳しくは、次回、サタンの誘惑のところで見る。
- (3) 当時の信者たち（レムナント）と一体化する
 - ① イスラエルの中で真に信仰ある者たちは、イスラエルの残れる者たち（レムナント）と呼ばれた。
 - ② 当時のレムナントは、ヨハネのメッセージを聴いて、それに応答し、彼から洗礼を受けた。
 - ③ イエスも洗礼を受けることで、彼らと一体化した。
- (4) 罪人と一体化した（Ⅱコリ 5:21）
- (5) 聖霊による特別な油注ぎを受けるため
 - ① 神がイエスに聖霊と力を注がれたのは、おそらく、このときである。
 - ② その結果が、使徒 10:38 「それは、ナザレのイエスのことです。神はこの方に聖霊と力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いてよいわざをなし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました」
- 5. イエスの年齢・・・およそ 30 歳（ルカ 3:23）
 - (1) イエスの受洗は、紀元 27 年頃。イエスの誕生は紀元前 7 年または 6 年頃とすると、受洗したときの年齢は、33 歳か 34 歳
 - (2) 30 歳という年齢について当時のユダヤ教ラビたちの教え・・・証言能力は子どもには認められない。証人となれるのは 10 歳以上。子が家を出て、自分の主人とする人についていけるのは、30 歳以上。ということで、誰かと行動を共にするのは 30 歳になってから、これがひとかどの人生をめざす者の取るべき道である。
 - (3) メシアの称号のひとつ「人の子」
 - ① 神人であるメシアの人性を強調する
 - ② イエスが自分のことをいうときに、よくこの呼称を用いた
 - (4) 「人の子」と呼ばれた預言者 エゼキエル
 - ① エゼキエル 1:1 エゼキエルの預言者としての召命は、彼が 30 歳のとき
 - ② そのときの場面は、「川のほとり」、「天が開け」